

---

❖ 講演会・研究セミナー ❖

---

---

若手研究者研究発表会

参詣曼荼羅の空間と民俗

2021 年 7 月 7 日 (水) 17:00～18:30

龍谷大学 大宮学舎 清和館 2 階会議室/Zoom

---



発表会の様子



---

❖ 概 要 ❖

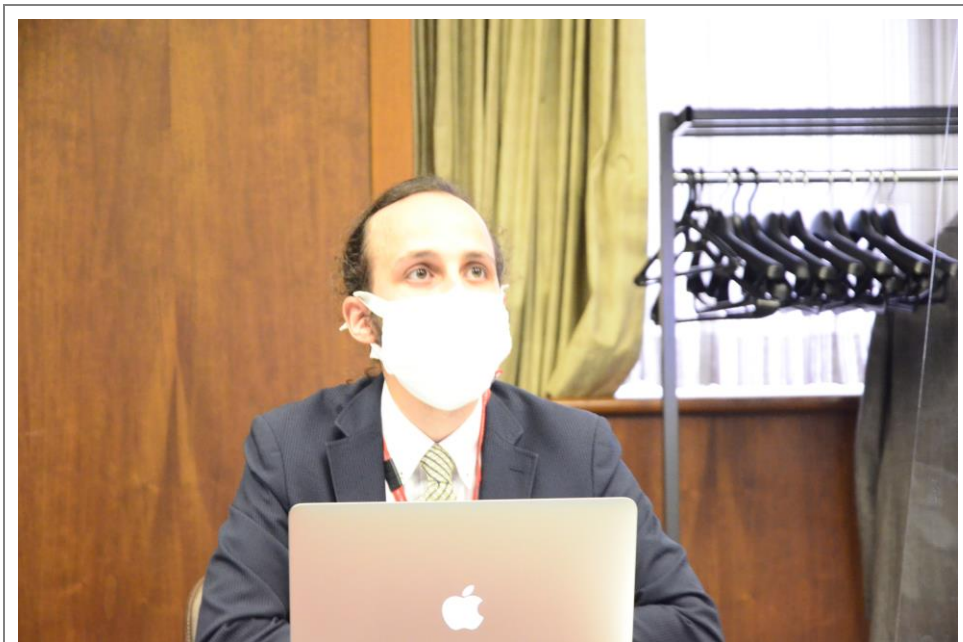
---

若手研究者研究発表会は、研究者育成のため今年度から新たに設けられた研究会である。本研究会の目的は、同センターに所属する博士研究員やリサーチ・アシスタントなど同センターに関わる若手研究者の研究を国内外に紹介し、学術的なネットワークの構築を促すことにある。2021 年 7 月 7 日（水）、その第 1 回目の研究発表会が「参詣曼荼羅の空間と民俗」というテーマで開催された。

---

講 演 者：マルクス・リュウシュ 氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター 博士研究員）

---



リュウシュ 氏

一人目の発表者、マルクス・リュウシュ氏（同センター基礎研究部門博士研究員）は「西国巡礼における参詣の目的—参詣曼荼羅にみる空間構築と利益—」と題された報告において、参詣曼荼羅では宗教空間がどのように描写されているのか、またそこでは参詣によっていかなる利益を得ることが想定されているのかについての考察を示した。まずリュウシュ氏は、参詣曼荼羅に表現される空間は実測地図のように現実の寸法や距離を示すも

のではなく、そこでは目的に合わせて描かれるものや描かれ方が操作されていることを指摘する。その具体的な事例として今回氏がとり上げたのが、那智参詣曼荼羅と善峯寺参詣曼荼羅である。

一方の那智参詣曼荼羅には熊野信仰をかたちづくる那智の寺社の様子とそれぞれの社寺にまつわる伝説や縁起が描かれている。中でも青岸渡寺は、熊野霊場の寺院であると同時に西国三十三所巡礼の一番札所でもあり、また高野山や伊勢とも関係が深いことなど、多様な側面を持つ寺院である。他方の善峯寺参詣曼荼羅には善峯寺の境内の様子が中心的に描かれている。リュウシュ氏によれば、そこで描かれる善峯寺の境内は比叡山延暦寺の空間と酷似しているという。延暦寺境内は西塔、東塔、横川の三つのエリアに分けられるが、このエリアはそれぞれ善峯寺における北尾、中尾、南尾に対応しており、それらはさらに天台密教で重要視される三つの経典（大日経、金剛頂経、蘇悉地経）と関連付けられるという。

これら二つの寺院はどちらも巡礼によって滅罪する修行の場として表現されているが、同発表ではそこで得られる利益のニュアンスはそれぞれ異なっていることも指摘された。那智参詣曼荼羅では補陀落渡海など他界的要素の強い図像が目立つ一方で、善峯寺参詣曼荼羅では宗教実践の様子が主に描かれる。また前者では巡礼の利益として極楽往生に焦点が当てられるのに対して、後者では現世利益がより強く意識されているという。

---

講演者：坂 知尋 氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター 博士研究員）

---



坂 氏

二人目の発表者の坂知尋氏（同センター国際研究部門博士研究員）の発表「向かい合わせの奪衣婆像―善光寺参詣曼荼羅における死と再生の表現―」では、善光寺参詣曼荼羅に描き込まれた二体の奪衣婆像に焦点があてられた。

人が死後に渡る三途の川のほとりで死者の衣を剥ぎ取るとされる鬼婆・奪衣婆は日本の地獄イメージの一部として広く知られている。善光寺参詣曼荼羅では奪衣婆は善光寺境内の中門のそばに配置されている。ところが氏によれば、善光寺に奪衣婆堂が存在したという記録はなく、善光寺の古地図や境内図に描かれる事例もないという。坂氏は、参詣曼荼羅には現実空間には存在しない想像上のものが描かれることがあることを指摘し、善光寺参詣曼荼羅の奪衣婆像もまた実際には存在しない図像であると推測する。

二体一組の奪衣婆像という特異な図像表現が採用された理由として、坂氏は、地下で行われているために地上の描写を基調とする画面上では直接的に描くことのできない儀式、すなわち戒壇巡りを示唆するためではないかと論じた。戒壇巡りは善光寺本堂の地下通路を通過して善光寺本尊の阿弥陀如来と結縁する儀式だ。この儀式は一度死んで生まれ変わるという擬死再生の性格を持っており、地下通路は地獄と観念されている。また、氏は戒壇巡りの料金が三途の川の渡し賃と同じ金額に設定されていたことや、奪衣婆は死者を地獄へ送り出すだけでなく人の誕生にも関わるとされていることなどを踏まえ、善光寺参詣曼荼羅中の二体の奪衣婆像は戒壇巡りで体験する死と生まれ変わりを表現しているのではないかと考察した。

閉会の挨拶にかえ、今後も継続的にセンター所属の若手研究者を中心に研究発表会を開催していくことが宣言された。